

【本小委員会が目指す「豊かな未来社会」について】

1. 「豊かな未来社会」とは

(1) 「豊かさ」を考えるに当たって

本小委員会は、名称を「豊かな未来社会に向けた自動車行政の新たな展開に関する小委員会」という。本小委員会での議論は、目指すべき方向として、「豊かな未来社会」を念頭に置きながら、自動車行政の展開は如何にあるべきかについてなされてきた。

では、「豊かさ」とは、どのようなことを内容とするのであろうか。「豊かさ」に対する考え方は、時代、社会構造、その他様々な環境により変化するものであるが、本小委員会では、2050年を見据え、国土づくりの理念や考え方を国土交通省が示した「国土のグランドデザイン2050」における考え方を基本に据えてきたので、報告の冒頭に、「豊かさ」に対する考え方を明らかにする。

(2) 「多様性」と「連携」

一つ目の切り口として、「豊かさ」は、「国土のグランドデザイン2050」における「多様性」と「連携」とを重要なキーワードとして理解されるのではないだろうか。以下、「国土のグランドデザイン2050」の該当部分を引用する。

人口減少社会において、各地域が横並びを続けていけば、それぞれの地域は並び立たず、サービス機能や価値創造機能が劣化していく。このため、横並びを脱し、個性を深めていく必要がある。

しかしながら、我が国が長い歴史の中で育んできた多様性が、近代化や経済発展を遂げる中で徐々に失われてきている。このため、まずは各地域が多様性を再構築し、主体的に自らの資源に磨きをかけていくことが必要である。多様性を磨き上げ、深い固有性を獲得すれば、それは世界的な普遍性を持ち、日本の新しい成長エンジンになる。その上で、複数の地域間の「連携」により、人・モノ・情報の交流を促進していく必要がある。これにより、多様性を有する地域間で、

1) 機能を分担し、互いに補完する、2) 目標を共有し、共に進化する、3) 融合し、高次の発展を図る、ことができるようになり、圏域に対する高次のサービス機能の確保と新たな価値創造が可能になる。

「多様性」は深い固有性の獲得につながり、世界的な普遍性を持ち、日本の新しい成長エンジンとなるとされている。そして、固有性を持った複数の地域が「連携」することで、高次のサービス機能の確保と新たな価値創造が可能になるとされ

ている。成長、新たな価値創造につながる「多様性」の再構築と各地域間の「連携」は、具体的にはどのようにイメージされるのだろうか。「国土のグランドデザイン2050」では、「多様性」は「ふるさと」に支えられるとの考えを示している。該当部分を引用する。

この日本列島に、有史以来居住してきた人々は5億人を超える。それぞれが厳しい自然条件に対する備えを施しつつ、時代に応じて国土に対する様々な働きかけを行ってきた結果、集落、農山漁村、都市が生まれ、産業、交通施設等の集積が進展してきた。四季折々の多彩な自然の中に、かつては60余州300諸藩と言われた多様な社会があり、各地域には歴史、文化、生活、ものづくり等の系譜が存在する。また、日本人は、そうした地域とのかかわりの中で、勤勉、和を尊ぶといった国民性をつくり上げ、アイデンティティを形成してきた。いわば、人は多様な風土に働きかけ、多様な風土は人に影響を与え、その相互作用により現在の日本の人と国土が形成され、その関係の中で、日本人は多様な地域に支えられる独自の文化、国民性を育んできたと言える。

(中略)

これら文化は、人々の営みの中でこそ育まれる。日々の営みの中で、家族、友人、地域、職場、学校等様々な人とのつながりを通じて、人は地域との分かちがたい関係を築き、その関係が、都会であれ、農山村であれ、地域への愛着となることで、そこが「ふるさと」になる。そして、その「ふるさと」が、長い年月を経て、それぞれの地域の特性と相まって、地域固有の文化を形成していく。その中で、人はそれぞれの地域の文化を呼吸しながら生きていく存在とも言える。

「住み慣れた地域に住み続けたい」という思いは、人が文化を呼吸して生きていく存在であるゆえの当然の思いであり、最も大切にしていかなければならないものの1つでもある。そして、このような「ふるさと」への思いは、日本の文化、国民性を支えることにつながり、国際化の中で日本が生きていく上での強みにもなるものである。

そして、「ふるさと」に支えられて育まれた「多様性」の「連携」は、様々なレベルでのものが想定されている。

多様性と連携により生み出される対流には、様々なレベルが考えられる。特定テーマ間での対流や、身近な地域の中で起こる小さな対流もあれば、国土全体の産業構造にかかわるようなダイナミックな対流もある。小さな対流が生まれ、その積み重ねが創発を引き起こし、やがて大きな渦となって国土全体の大きな対流につながり、思いも寄らないような新たな価値を生み出していくよう、様々なレ

ベルで対流を活発化させていく必要がある。

また、人・モノ・情報の対流は、物理的なネットワークや情報ネットワークを通じて行われることから、対流を加速できるよう、ネットワークも高機能化していく必要がある。

このように、「ふるさと」の「多様性」を相互に「連携」させることで、「豊かな未来社会」が構築されていくイメージが、まず考えられる。

(3) 2つの価値観の並存

地域にあり方に着目した上記のような考え方を一つの切り口とすると、二つ目の切り口として、グローバル社会の中での日本のあり方については、どのような考え方に基づいて「豊かさ」を考えていけばよいだろうか。「国土のグランドデザイン2050」では、「国際志向」と「地域志向」という2つのベクトルを並存するものとして考えていくことが示されている。

戦後日本は、豊かさを目指し、奇跡とも言える経済成長を遂げてきた。そして、今日、グローバル化が進展する中で、豊かさを維持、発展させるため、さらなる成長が求められている。それを可能とするためには国際社会での競争を勝ち抜いていく必要があり、積極的に国際社会に打って出て行くべし、といった考え方、価値観が強くなってきている。

一方、従来型の経済一辺倒の豊かさではなく、自然や地域との触れ合いを大切にする生き方も求められており、田園回帰と呼ばれるように、地域を志向し、地域を大切にしたいという若者も増えてきている。このように、いわば「国際志向」と「地域志向」とも言うべき2つの考え方、価値観が存在する。これらは相矛盾するものではなく、経済社会が成熟する中で、社会全体、さらには、個々人の中でも価値観が多分化した結果生じているものと考えられる。したがって、このような価値観を対立概念として捉えるのではなく、社会を評価する上での2つのベクトルのようなものとして捉えていく必要がある。特に、個人と個人、地域と地域がグローバルに結ばれる時代にあっては、どのような個人、地域であっても、多かれ少なかれ複眼的な見方がこれからは必要となっていくと考えられる。

グローバル社会の中での競争に勝ち抜いていく「さらなる成長」を目指す「国際志向」のあり方は、従来の経済的な「豊かさ」を発展させたものと考えられるが、これのみではなく、地域を大切にする「地域志向」も併せて、両方の価値観を並存させて「豊かさ」を複眼的に見ていくことが、今後必要となっていく見通しが示されている。

次の章では、本章で示された「豊かさ」の指標である「多様性」と「連携」及び「国際志向」と「地域志向」の並存のそれぞれが、どのように自動車と関連して行くのか、自動車がこれらの指標にどのように寄与することができるのかを考える。

2. 「豊かな未来社会」に「自動車」が寄与できること

「豊かさ」の指標である「多様性」と「連携」及び「国際志向」と「地域志向」の並存のそれぞれに、自動車はどのように寄与することができるのか。

「自動車」は、機械としての自動車、自動車を使用したり整備したりする事業、それによって保障される移動など、いくつかの側面から考えることができる。これを、「豊かさ」の指標との関連で考えると、次のような役割を想定することができるのではないか。

(1) 「多様性」を確保するための「ネットワーク」「地域産業」としての側面

自動車を使用する運送業、整備する整備事業は、地域の移動ニーズ、整備ニーズに応えるものとして、従来も、また今後とも重要な役割を担っている。移動ニーズ、整備ニーズは、各地域で人々が諸活動を行う基盤となるものであり、「多様性」の確立のために必要不可欠のものである。特に、自動車交通は、地域に密着した交通手段として、人々に一番近いところで生活を支え、まさに「ふるさと」の形成に役立っている。

また、こうした側面と並んで、事業を行う企業が、地域の雇用の重要な支え手となり、地域経済を支えていることも重要な役割である。「多様性」を「ふるさと」で確立するに当たっても、そこで人々が生計を営むことができることは大前提となるものであり、こうした点からも「自動車」の寄与できることは大きい。

(2) 「連携」を確保するための「ネットワーク」としての側面

「自動車」の持つ特性のうち、特に「ネットワーク」に着目すると、「多様性」を確立した各地域を結ぶ「連携」の確保に対して、大きな役割を担うことがわかる。人、モノの交流が新たな価値創造を生み出す中で、「自動車」は人の移動（バス・タクシー、自家用車）、モノの移動（トラック）いずれにおいても必要とされている。

(3) 「国際志向」と「地域志向」の並存に寄与する「自動車」

自動車製造業は、我が国の経済主体の中でも大きな実力を持ち、国際的な競争力を持つ。世界中で購入される車を製造するという販売競争力はもちろんのこと、ハイブリッドカー、電気自動車、燃料電池車など、理想の自動車を次々と生み出し世界をリードする技術開発力の面でも世界の先頭を走る。この観点からは、「国際志向」を牽引する主体として、経済界での期待も大きい。

一方、軽自動車、超小型モビリティ、二輪車、パーソナルモビリティ等は、今後の高齢社会、地域社会における移動にも大きく貢献することが期待され、「地

域志向」の面でも大きな役割を担っていく。この両面を担っていくことから、2つの価値観の並存にも、「自動車」は大きく関わっていくことになる。